

Bは又幸福な家に生れていたい事のできる身分であつた。そして彼の健康も亦常に好かつた。

そしてAとBとはいつも育たなくてはく思つてゐた。AはBののび／＼と育つ間に雑草や、石や、木の根をさける事に骨を折つてゐた。然しAはいつか大木になれる事を信じてゐた。そして夫等の妨を切り拂つてゐる内にすん／＼と平地に育つBを見る時にも、自分の生長の力を信じられたのでいつも微笑んでゐられた。

Bは／＼と進んで行つた。AはBの事を考へた。「Bは總てに於いて、日の下に生れついてゐるのだ。然し力では自分は負けないぞ。力だけをはかりにかけたら何方が勝つと思つてゐるのだ。」Aはかう思つてゐた。そして彼は雑草を刈る事に日を費してゐた。

死が、Aの上に来た。Aは遂にこの信念を捨てずに最後まで歩んだ。歩く事の出来る自分、歩き得る自分である事を、誰よりも固く信じて、少しもそこにたゆみなく歩いて来て、歩ける丈を歩いて彼は死んだのであつた。

然しAの力は殆ど誰にも知られなかつた。Bのまぶしい様な名聲がもてはやされてゐる世の中にはAの死などは何の影響もなかつた。

「こんな運命の人もあるのですよ。」大きな聲で誰かゞなりつづける様に、私ははつとして、そして静かに、うつむいてゐる。

「早く大人になりたいさはいひました。然し早く年を取りたいさば申しませんでした。」

誰も知らぬ寂しさを有つ人が一番大きいのだ。

私達は空を仰ぐさきその寂しさを思ふだらうか、空は一度も私達に寂しさを訴へはせぬ。地は幾度私達に苦しさをうつつたへたか。黙つて太古のまゝ、天も地も無言で全てを包擁してゐるではないか。大きいものゝ寂しさは絶對なのだ。それはうつつたへていやざるべきものではない。

文展をみて後に

ひさ子

今年の文展の日本畫では、物語りものから取つたらしい武者繪や姫君や、風俗やは、單に昔の華やかな生活をなまのあたり見る事が出来た、さより何とも言へない。

美しくあればあるだけ脆ささ果敢なさを語つて居る様な氣がした。小泉八雲氏は日本の文物を評して「無常性」と云はれたさうだけれども此氣分は、何れにも伴つて居る様な氣がした。

その中で「夜なが」は比較的はつきりした輪廓をもつてゐた御簾の蔭に、稚子の顔が仄見えて、姫君が徒然に簀なご振られる長夜の趣を増して居た。

「炊の夢」も美しいと思つた。しかしあまり調ひすぎて居る様な氣がした。時が流れる限り、未成品であるべき現在の断面が表はせないから、繪として形をなす以上は時内を通じて完成させて了ふから、仕方がないとも思つた、そして時間と空間との美の極致は音楽と繪畫の對立ではあるまいかと思つた。

「唄なかげ」の前には軽く歩みを止めさせられた。悲しい表情の女の人である。人物それ以外に、何等の背景も添景物もなく居るが

ゴオホは憐れな人を救ひたい欲求と、自己表現の欲求がつけにいたましくもつれあつてゐた人であつたさういふ。トルストイもこれであつた。然しトルストイは前者を根として後者を従屬せしめやうとしたし、ゴオホは後者を根として、前者を従屬せしめたのであつたさういふ。

この二つ——小さい、おぼつかないものかも知れないがこの二つが私にもあつて此頃常に争そふてゐる。

「今にみて居れば、強くなるぞ。」かう心のどん底で叫ぶのも私だ。

「世の中さういふものは恐ろしいものだ。私が自分の心を押へつけられて動きのされなくなるのも世の中だ。」かういつて世の中をこはがつてゐるのも私だ。

束になつてかゝつてこやうとする意氣地のない人達。私はお前達を本當にきの毒な人だと思ふ。私は何があつたつてそんな人の仲間入りをするものか。それで、ここにあなたさういふものがあるのです、何處にあなたの價値があるのです。私はいつまでもあなたの方のその態度を否定したいと思つてゐる。

自分の體にみちあふれる力さういふものにふき驚く事がある。力の所有者である事を知らずにゐる日は苦しきもない。しかし苦しみの唯中まで突進する爲に力は私達に授けられる。力が大きければ大きいほど、寂しさも大きいに違ひない。

ら、見えない。餘韻の想像を強ひすには措かない力を感じた。

日本三景も好だつた。殊に橋立がよい。

掛瀑四態の中、冬の山にさ小な幾つもの瀧の送りを描いた處が嬉しく見られた。

一体に日本畫は否現實な美であると思ふ。活動的な力の溢れは感じられない。でも自然な人物も靜物的に取扱ふ處に、實生活からのへだたりさ、それに伴ふ美さが生じるのではないかと思つた。

洋畫には好きながたくさんあつた。「バーの午後」は最も力強い印象を受けた一である。暑い日であらう額も赤く輝いた五十前後の爺様と卓に腕をまけてゐる聞手とボーイらしい顔をもつた若者と、船員等の仲間に見るも一人の男とを、ありの儘に取扱つて居ながら人生の断面をみせる様な力強さをもつて逼る、好い繪だと思つた。

「九月の午後」も影が和らかい響きを與へて呉れた。

「阿波の鳴門」は鮮明さに於て異彩を放つて居る。帆かげの水に映るあたり、鏡の様に澄んだ水面を普通の水面に表はしたあたりなご嬉しく眺めた。

信濃の或村はなつかしかつた。

「田植」「四月の野」労働からくる力の美の溢れであり。

中村不折氏の維摩居士巢父汚流に飲まずには一寸のむだもない緊張した繪だと思つた。他の何れにも感じられない嚴かさをもつて居た題材からも描き方からも東洋的と言ふ氣がした繪によつて想像するさ不折氏は、いかめ顔の人の様に思へる。色彩が老人じみた鏝をもつてゐる。

母の愛さういふのは幸福な光に充ちた人生の表徴の様に感じられ

た。小鳥屋にも三月の野にもなつかしい思を引かれた。

彫刻で老ひと言ふのを見た時今までのどにつかへて云ふ事が出来なかつた自分の感じが、すら／＼流れ出る様な気がした。老いは人間の間に是非来ればならぬ悲惨な出来事の一である。

呑氣さうな狩衣の胸を、思ひ切りふくらませて、空を仰いで居る小さな木彫の大空は見ても清々するものだつた、薄彫の秋は長いこと見た全体から来る落ちついた感が沁み通る様に感じた。何國の國の人さと思はれないだけ、親しみ深く眺められたのであつた。

生れて始めて文展を見、而も素通りした丈であるから何も言へる筈がない。始めて文展といふ名を開かされたのは、小學校の高等一年の時だつた、「百姓が作つた米を食ふ」と同じ理窟で俺も東京へ行つて来た」とその先生は吹聴さも辨解さもつかぬ口調で話された。

その時黒板に描かれた豆の秋の略圖横山大觀といふ名前「若き日の影」といふ彫刻の名前許りが今もはつきりと思ひ出される。

あゝ長いこと待ちあぐんで居た日が貧しい如上の印象のみで終つた事が限りなく物足りなく又物寂しい。



□鉛筆の削り方

專一

木曜日の晝休みの時間、「外へ出ませうか。」と私がさそひに参りました時、茂さんは鉛筆を削つていらつしやいました。それで私はそれがすむ迄待つつもりで、机のそばに立つて茂さんの手許を見て居りました。

小學校の生徒が手工の時によく使ふ切出しの、あまりよく切れさうもないので、力いっげいっげつていらつしやいました。何だかごつ／＼といふ音がしやうな程、一つ一つ大げさに力が入つて、部厚な赤び茶色のけづりかすがポツリポツリ白紙の上におちてゆきました。

如何にも器用に鉛筆を削る方がよくあります。小刀のあさを美しく揃へて、削り始めから心の尖までがなだらかにすらりと細つて行つて居る様なけづり方の手にして、「ほんのかりそめのものさはいひながら、」と感心した事もございました。

所が切出しの厚い刃でえぐられる様に削られてゆく茂さんの鉛筆の先は、いかにも珍らしい形になりました。「なんだかつむじを巻いて居る様な形。」といつて二人は笑ひました。笑ひの中に鉛筆はごろりと筆箱の中にごろがされま

した。

熱心なまじめな、ごく真すぐなこの友の平生の心持が、ほんのこの鉛筆の削り方にも確かにあらはれてをります。殊に五分位ひよろ／＼と出た心が、またその人の飄逸といふ様な趣をよくあらはして居ります。

誰一人としてこれと全く同じに鉛筆を削る事は出来ずまい。茂さんの鉛筆を私にあげ／＼と眺めて、まことに面白く感じました。

向ひの岡

尾上柴舟

夕靄はしづかにわたれひとりわが向ふ岡への草をよこぎり
麓には紫のきりかゝりたり日の入り方を山にきたれば
残る菊うつぶす土のま黒きに霰まろびて冬ふけにけり
冷えし身をさつとひたせば風呂の湯の少しこぼるゝ音もよろしき
清らかに身に沁みわたることちする湯あがり後の足^{あな}うらのひえ
彼の岡を半出でたる月の前草のなびきのほの見ゆるかな
うす青き斜面の麥に乏しくも光投げ居り峽に入る日の
風絶えぬ木だに草だに落葉だに動かず暮は悲しきものを
鳥去にし庭の青木の葉のかげり重たく見えて夕さりにけり
かぐろなる岡を人ゆく何事か夕日の前をうたひ人ゆく